

〔研究ノート〕

イアゴはヴァイスか悪魔か

—— 道徳劇における悪魔の通時的考察 ——

横尾元意

I. 序 論

Leah Scragg は1968年の“*Iago-Vice or Devil?*”という論文で⁽¹⁾, Iago は自分の悪意に動機のあるが如く振る舞ってはいるが、動機のない役回りを演じる伝統的な Vice の系譜に属するという Bernard Spivack に代表される見解に対して、もし、Vice の典型的な諸性質⁽²⁾ が道徳劇の全盛期の前後の他の劇に登場する悪魔の中に見い出されるならば、Iago は Vice ではなく悪魔からその性質を受け継いでいるとも言い得ると述べて、先づ、York Mystery Cycle (c. 1362-1598), Chester Mystery Cycle (c. 1377-1575), Wakefield Mystery Cycle (originated 1390-1410), Newcastle plays (c. 1462-1567) の中から悪魔の個所を例にあげて、Vice の属性を悪魔も共有していることを示し、さらに、Mystery plays において、この種の悪魔は典型的なものであり、道徳劇が出現する以前より存在し、道徳劇が人気を博していた時期にも上演され、道徳劇が舞台から消えた後も、観客に馴染み深いものであったと考えられると述べている。

次に、Vice の出現以前の道徳劇 *The Castle of Perseverance* (c. 1405-25), *Mankind* (c. 1465-70), *Mind, Will and Understanding* (1450-1500) を例にあげて悪魔を検証し、Vice と同じく the seducer

of mankind として表現されていることを示して、古い道徳劇の悪魔の役割が Vice によって受け継がれるのだと論じ、さらに、Tudor 王朝時代の劇作家の中には Vice と悪魔のそれぞれの役割を混同しているものもいると指摘している。それ故に、Iago が Vice よりも悪魔からその性質を引き継いでいる可能性が、極めて、高いと Scragg は検討をつけ、Iago の悪魔性について批評家達の様々な見解を紹介した後、作品 *Othello* から Iago の悪魔性に関連する台詞を列挙して、Iago は amoral ではなく a moral being impelled by a burning desire to feed fat a consuming hatred with revenge と考えられると述べている。しかしながら、結局、All that can be claimed is that the Devil's claim to be Iago's forefather is at least as good as that of the Vice, and is supported by evidence in the play. という中途半端な結論で終えている。

Scragg は、悪魔と Vice⁽³⁾ に注目しすぎて、*The Castle of Perseverance* の七大罪源に代表される vices との関係を通時的に検討するのを怠っているために、彼の論旨は悪魔と Vice の役割について Tudor 王朝の劇作家になぜ混同があるのか、また、Iago には悪魔的側面だけでなく、*Othello* を嫉妬に駆り立てるといふ著しい働きがあるのかについてまでは説明出来ないのである。

Ⅱ. 悪魔の呼称の特定

英国道徳劇の悪魔像を通時的に見直す前に、悪魔の意味を限定し、その呼称を特定しておく必要がある。

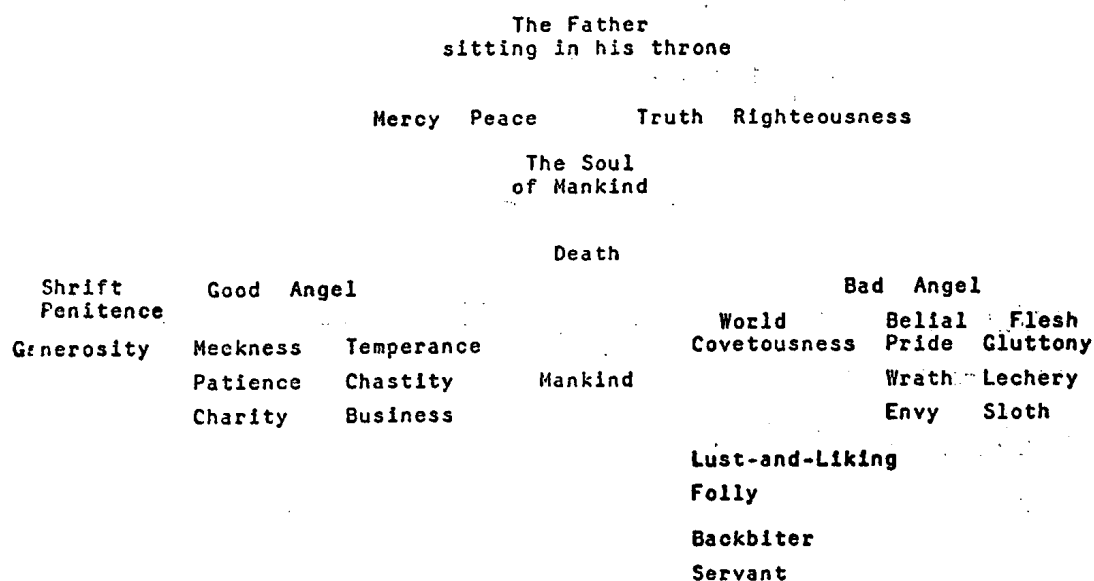
悪魔は The Devil の他 Satan と呼ばれる。これは、ヘブル語では敵対者 (adversary) という意味を持っている。これが新約聖書の年代の古い部分において Satan と語頭を大文字で書かれ悪魔を意味した。

墮落天使 Satan は、もともと、virtues の位階の最高位を占める熾天使達 (seraphim) の長で、Talmud によれば、第6日目に創造されたと言われる。Satan はイザヤ書14章12節の誤読が原因で、Lucifer (“light giver”) とも呼ばれる。Satan と同一視されるのに Berial (Beliar, Belial) と呼ばれる墮落天使がいる。パウロもコリント後書6章15節で Belial を chief of demons あるいは Satan と考えている。Satan と混同されるものに Beelzebub (“god of flies”, “lord of chaos”) がある。元来、シリアの神で、中世ユダヤ教神秘哲学 (Cabala) においては地下の世界の9つの悪の位階の頂点にいる。新約聖書では、悪鬼 (demons) の長と呼ばれている。John Milton の *Paradise Lost* (I: 79) では力と罪過において Satan の次に位置づけられている。また、他に The Fiend, The Demon という呼称も使われる。

Ⅲ. 道徳劇の悪魔像⁽⁴⁾

道徳劇の悪魔像を探る上で、包括的な枠組みを提示してくれるのが *The Castle of Perseverance* である。

この劇の登場人物の位置関係を図示すると次のようになる。



玉座の父なる神を頂点として、神の四姉妹が位置し、死によって肉体を離れた人間の魂の救済について、彼女達は天の会議を開くことになる。人間には、キリストから遣わされ、彼に仕えるように勧める善天使と、地獄から来て、現世へ誘う悪天使の両者が割り当てられている。善天使の下には、貴婦人にして7人姉妹の7美德がおり、その友人に告白と懺悔がいる。他方、王なる悪天使の下に王とも公爵とも呼ばれる現世と悪魔ベリアルと肉性⁽⁵⁾がいる。その下に、7人の兄弟にして公爵の貪欲・傲慢・憤怒・痴妬・大食・好色・怠惰という名の七大罪源 (Seven Deadly Sins) が、それぞれに配置されている。貪欲の下位に快樂・愚行という騎士がいて、さらに、陰口と召し使いが続き、秩序立った構成になっている。そして、父なる神と四姉妹の間にキリストと聖霊と聖母マリアが入るものと思われる。

この劇の悪魔ベリアルには、三人の息子の傲慢・憤怒・痴妬がおり、図から分るように、神の支配組織の下にあり、悪天使の支配に属し、現世・肉性と同格の位置にある。また、悪魔の劇冒頭の台詞⁽⁶⁾に、その有り態が集約されている。

BELIAL [from his scaffold]:

Now I sytte, Satanas, in my sad synne,
 As deuy dowy, in draf as a drake.
 I champe and I cha[f]e, I chocke on my chynne,
 I am boystows and bold, as Belyal the blake.
 What folk that I grope thei gapyn and grenne,
 I-wys fro Carlylle into Kent my carpynge thei take,
 Bothe the bak and the buttoke brestyth al on brenne,
 Wyth werkys of wreche I werke hem mykyl wrake.
 In woo is al my wenne.
 In care I am cloyed,
 And fowie I am anoyed,
 But Mankynde be stroyed,
 Be dykys and be denne.

Pryde is my prince in perlys i-pyth;
 Wretthe, this wrecche, wyth me schal wawe;
 Envye into werre wyth me schal walkyn wyth;
 Wyth these faytourys I am fedde, in feyth I am fawe.
 As a dyngne devyl in my dene I am dyth.
 Pryde, Wretthe, and Envye, I sey in my sawe,
 Kyngys, kayserys, and kempys and many a kene
 knyth,
 These lovely lordys han lernyd hem my lawe.
 To my dene thei wyl drawe.
 Al-holy Mankynne
 To helle but I wyne,
 In bale is my bynne
 And schent undyr schawe.

On Mankynde is my trost, in contre i-knowe,
 Wyth my tyre and wyth my tayl tytly to tene.
 Thorwe Flaundris and Freslonde faste I gan flowe,
 Fele folke on a flokke to flappyn and to flene.
 Where I graspe on the grounde, grym ther schal growe.
 Gadyr you togedyr, ye boyis, on this grenel
 In this brode bugyl a blast wanne I blowe,
 Al this werld schal be wood i-wys as I wene
 And to my byddyngge bende.

Wythly on syde
 On benche wyl I byde
 To tene, this tyde,
 Al-holy Mankende.

彼は、自分の罪を自覚しており、地獄の穴に住まざるを得ない理由を認識している。しかし、神に許しを請う謙虚さはもとよりない。しかも、自分の境遇に安んじているわけではなく、歯軋りをし、苛立ち、顎を突き出し、苦悩の中にある。そして、荒々しく、尊大 (bold) である。そこには、悪魔の国の威厳ある王の姿は見られず、人間に仇なし、

悲しませることに悪魔の喜びがある。従って、ベリアルが、傲慢・憤怒・痴妬を伴う理由が分る。悪魔は、この三人の vices を使って戦い、彼等の働き振りによって満足を得るのである。換言すれば、悪魔の役割を、その命令に基いて、この三人が代行し、具現化していることになる。その目的は、すべての人間を地獄に誘い込み、人間が死ぬと、その魂を地獄の中に閉じ込めることにある。それで、食欲の呼び出しに応じて、傲慢・憤怒・痴妬がベリアルに、それぞれ挨拶して出掛ける時、彼等を激励している悪魔の台詞からも分る⁽⁷⁾。

劇の半端になって、堅忍の城の中に入ってしまった人間を奪還するよう、悪魔が悪天使より命じられると、彼等の不手際に怒って高慢・痴妬・憤怒を打ちすえた後、彼等に戦闘準備をさせ、それぞれ悪天使より指示された攻撃相手に、戦いを挑むが、ベリアル軍は温和・忍耐・慈愛にバラの花の一斉射撃を受けて敗退することになる。これ以後、彼等は登場することはない。悪魔は、この劇では敗北を経験するだけでなく、七大罪源による誘惑行為の中心人物とはなっていないのである。

Mankind (c. 1465-70) では Titivillus (“all vile things”) という名の悪魔が登場する。彼は、*The Castle of Perseverance* の悪魔に比べ、Newguise 達から人望があり、理性的で、計画性があり、人には見えないものの直接、*Mankind* に能動的に働きかける。Titivillus には、Newguise, Nowadays, Nought 達の仇を討つという動機がある。さらに、絶望していた *Mankind* が Mercy の勧めにより、彼を愛するようになった時、自分は、Titivillus の fantastical visions によって、Newguise, Nowadays, Nought に従うようになったと墮落の原因を分析している。*Mankind* では、悪魔は、人間の3人の敵として、劇の末尾で現世・肉性と並び称されているが、Titivillus は、この3者のリーダー格⁽⁸⁾であると見做されて、*The Castle of Perseverance* とは相異を示している。

Mary Magdalene (c. 1480-1490)⁽⁹⁾ では、さらにこの傾向を強めている。悪魔は、人間への憎悪と人間破滅の希求という動機を持っており、現世と肉性の助力を請いながら、*Mary Magdalene* を攻撃しはじめる。彼は、七大罪をも支配下に置いている。さて、*Mary* が善天使の警告によって、自分の罪を嘆き、キリストに従う決心をして、シモンの宴席でキリストの足を洗って罪の許しを受けると、悪天使が *Belfagour* と *Belzabub* によって懲らしめられるという場面もある。

年代が下り、宗教改革時代並びに、それ以後の道德劇になると、神対悪魔という構図がクローズ・アップされるようになる。その例に、*John Bale* の *Kyng Johan* (1536-60) や *Richard Wever* の *Lusty Juventus* (1547-53) を挙げることが出来る。Edward VI 時代に、ローマ・カトリック教会を攻撃しながら、*Paul* と *St. Augustine* に依拠したプロテスタント教義の宣布を意図して書かれたと思われる後者の劇では、主人公 *Lusty Juventus* が、*Good Counsel* によって、*the knowledge of this heavenly gospel* を知るようになり、神を畏れ、神の約束を信じ、神と隣人を愛する生活に入ると、*Devil* が登場して、神の言葉が隆盛となり、悪魔の権威、業、機略など一切が蔑ろにされているのを嘆いて、若者の心を肉欲的な楽しみに向けさせる必要を感じ、呼び出した息子 *Hypocrisy* (偽善) に、やがて悪魔の王国は滅びてしまおうだろうと言って、彼に *Friendship* という名を与え、真理を急がしく、いたる所で伝えている主人公 *Juventus* の口を塞ぎ、神の言葉を冒瀆させるよう頼み込んでいる。それで、*Juventus* は *Hypocrisy* の誘惑により、神の言葉を捨て *Abominable Living* に心を寄せて墮落することになる。この様子を嘆く *Good Counsel* の言葉の中に、*peace, meekness, temperance, covetousness, pride, envy, verity, idleness* などの語が用いられてはいるが、寓意性も秩序立った組織性もうすれ、*vices* として登場することもない。劇全体にわた

り、悪魔の偽善が強調され、Hypocrisy, Fellowship, Abhorrible Living による Juventus の罪への転落も、Juventus に働きかけることがないにもかかわらず、Satan 自身にその責任が帰せられている。The Vice の行為の背後にも、悪魔の意図が働いているのである。

1560年代 Thomas Ingelend によって書かれた *The Disobedient Child* (c. 1559-70) の中の悪魔は、地獄に住み、頭の中には inventions, crafts, wiles が詰っており、地上のすべての人を悲しませようと日夜努力している。彼は物事をきちんと取り計らうことが出来るために、その結果に、あらゆる人が驚くのである。人を誘惑するのに covetousness, wrath, pride, lechery, gluttony, envy, murder を用い、いかなる点でも自分に匹敵するものはないと自信に満ち、観客に向っては、自分の誘惑、試みに注意を促す余裕がある。Iago を予示するような人物である。悪魔の台詞によると、人は神によらなければ悪魔に対抗出来ず、天の神には世界のすべてを治める支配権があり、悪魔はこの大地の一部を所有している。神の国は天上の天国にあり、神より悪魔に与えられたものではあるが、悪魔の国は地下の地獄にあると、神の国と悪魔の国という対比を強調している。さらに、現世は悪魔の息子であり、肉性は悪魔の娘であると述べて、現世と肉性より優位な地位を主張し、*The Castle of Perseverance* の悪天使あるいはそれ以上の位置を占めている。この神の国と悪魔の国という二者択一的傾向は、特に、カルビン主義の影響と思われるが、*The Conflict of Conscience* (1581) や Christopher Marlowe の *Doctor Faustus* (1591) の中にも表現されている。ルシファーの一配下メフィストフィリスが24年間フォースタスに仕えて、あらゆる望みを叶えるかわりに、その後、ルシファーに魂を譲るという契約が成立する。それは、結局ルシファーの王国を拡張することになる。フォースタスは後悔の念を覚え、キリストへ魂の救いを求めると、ベルゼバブとメフィストフィリスを伴って登場した

ルシファーが、キリストは正しい方なのでフォースタスの魂を救えず、それはルシファーの手中にあると言って、再び神への離叛を誓わせる。*Doctor Faustus* の悪魔は可視的に、直接、人間に働きかけ、またルシファーとベルゼバブの支配の下にある七大罪源は能動的に人間を誘惑することはない。ついに、ルシファー達がフォースタスの体を引き裂いて、彼の魂を持ち去り、確実な勝利を得ている。

IV. 結 論

Leah Scragg がイアゴは Vice か悪魔かという問題に、Vice の特性が道徳劇の出現する以前の *Mystery Plays* の悪魔の中にも見い出され、また、古い道徳劇の悪魔も同じく *the seducer of mankind* という性質を持っており、Iago は Vice よりも悪魔から、その性質を引き継いでいるという可能性がきわめて高いと論じた。それに対して筆者は、悪魔的側面だけでなく、Othello を嫉妬に駆り立てるという vice の著しい特徴があるのは、いかなる原因によるのかという問題を提示し、道徳劇に限定して悪魔とその他の vices の関係を通時的に見直してみると、悪魔の地位が年代を経るごとに上昇し、七大罪源はすべて悪魔の支配の下に置かれ、vices としての機能が消滅していくことが分る。道徳劇全盛期の Vice も背後に悪魔の意図が働いていることも明らかである。それ故に、Scragg が指摘しているように、Tudor 王朝時代の劇作家が Vice と悪魔の役割を混同しているように見えるのもあり得ることなのである。そして、イアゴは Vice が悪魔かという問題も意味のなさないものとなってくるのである。この事情について、筆者は次のように考えている。1381年の農民一揆における反徒が経済的・政治的病弊を熟知していて、社会環境の変革を国王に要求して自らの生活条件の安定を計ろうとしたように、人々は内面のみならず外界にも目

を向けざるをえない状況になってきていた。そのような多面的な社会状況もあって、七大罪だけでは治まりがつかなくなり、The Viceの発生を促すことになる。1500年頃には、エラスムスなどの影響により人間の自由意志が強調されると、悪い方向へ人間の意志を向けさせるものは何かということになり、罪の事象と罪へと人間の意志を向けさせる原因者とが区別されて、罪への誘因者として悪魔が浮上すると、七大罪源は悪魔の支配下に置かれ、能動的行為者としての性質が弱体化することになる。従って、悪魔は諸悪を引き起こす能力を潜在的に保有する能動的登場人物に成長し、The Viceをも配下に確保することになる。次に、カルビンなどによってプロテスタント神学が整備され、それが流布すると、悪魔は舞台の一空間に限定される存在ではなくなっていく。これが、悪魔ともThe Viceとも判別のつかず、七大罪源をも連想させる、相手によって様々な触手を伸しうるアメーバ状の登場人物を形成させることになる。それが、ときにはShylockとなり、あるときはIagoとなり、さらにはCleopatraに変化したりするものと筆者は推測しているのである。しかし、その検証は後日を待たなければならない。

—注—

- (1) Leach Scragg, "IAGO-VICE OR DEVIL?", *ASPECTS OF OTHELLO*, ed. K. Muir and P. Edwards (Cambridge U. P., rep. 1981), pp. 48-59.
- (2) *Ibid.*, pp. 48-9 :
 He was a gay, light-hearted intriguer, existing on intimate terms, with his audience. ... He invariably posed as the friend of his victim, often disguising himself for the purpose, and always appearing to devote himself to his friend's welfare. He treated his seduction as 'sport' combining mischief with merriment, triumphing over his fallen adversary and glorying in his skill in deceit.
- (3) *Ibid.*, p. 48 ll. 32-3 :
 'The Vice', the figure which emerged after 1500 from the group vices engaged in the psychomachia of the early morality plays (アン

ダーラインは筆者), 筆者は *Mankind* (c. 1465-70) の *New-guise, Nowadays, Nought* が *The Vice* の早い時期の例と考えている。

- (4) 日本英文学会北海道支部第32回大会(昭和62年10月4日 北海道大学)におけるシンポジウム発表原稿の一部に加筆したものである。
- (5) St. Bernard, *De Tribus Inimicis Hominis, Carne, Mundo, et Diabolo* に起源を持つと言われる「現世」「悪魔」「肉性」の組合せは *The debate of the body and soul* (1400), *Impartient Poverty* (1560), J. Donne の *Holy Sonnets* (c. 1625) にも見い出される。
- (6) *The Castle of Perseverance*, ll. 196-234.
- (7) *The Castle of Perseverance*, ll. 945-57.
- (8) *Mankind*, ll. 883-4.
- (9) Leah Scragg の前掲論文と Peter J. Houle, *The English Morality and Related Drama* pp. 99-100 を参照した。